社会変革への新しい動き

ソウル「二〇一四年世界社会的経済協議会設立総会および記念フォーラム」に参加して

牧 梶郎

昨年一一月一七日から二〇日まで「ソウル宣言の会」の一員として韓国ソウルに行き、「二〇一四年世界社会的経済協議会(Grobal Social Economic Forum: ＧＳＥＦ)設立総会および記念フォーラム」と現地の各種生協との交流会に参加した。この国際的会合は、昨年のフォーラムで採択された「ソウル宣言」の具体的実践の第一歩として企画されたもので、社会的経済のグローバルな協議会(アソシエーション)を実際に結成するのが目的とされていた。

「ソウル宣言の会」とプレフォーラム

協同組合など社会的経済に無縁な私が「ソウル宣言」(本文は「葦牙ジャーナル」109 号に掲載)に興味を持ったのは、社会的経済を営む諸団体とそれを支援する自治体がお互いに連帯し、世界的なネットワークを組織できれば、それは格差社会をもたらし今なお猖獗を極める新自由主義市場経済に対抗する一つのオルタナティブになりうる、と言明されたところにある。その頃の私は、生産力と資本主義に変わる生産関係について『葦牙』40 号に向けての論考を模索し、労働者生産協同組合こそ新しい主体となる可能性があると考えていたので、感応するところがあったのだろう。

ＧＳＥＦ設立総会へ向けての機運が盛り上がったのは、先のソウル市長選でこの構想を主導した朴元淳氏が市長に再選されてからである。日本でもＧＳＥＦへの参加を前提とするプレフォーラムが企画され、「ソウル宣言の会」として呼びかけ文が発表され、広く賛同者が募られた。私自身も呼びかけ人に名を連ね、身の程もわきまえずに「ソウル宣言の会」の事務局に参加した。

プレフォーラムは一一月二日に明治大学日欧社会的企業比較センターとの共催で行われ、二百数十名が参加して大いに盛り上がった。当日はソウル市からの三人の他に、各分野で活躍する六名(松岡公明農林年金理事長、保坂展人東京都世田谷区長、武健一中小企業組合総合研究所代表理事、郡司眞弓前ＷＥジャパン理事長、吉原毅城南信用金庫理事長、菅野芳秀山形県置賜自給圏構想）が報告を行った。時間的制約があり質疑応答などで問題をさらに深めることはできなかったが、締めくくりにソウル市企画課長がまとめてくれたように、それぞれが内容の深い示唆に富む報告だったと思う。

ソウル「二〇一四年世界社会的経済協議会」

プレフォーラムの成功をもとに「ソウル宣言の会」は、羽田からの参加者二八名を中心に総勢四四人をソウルに送り込み、ＧＳＥＦに参加するとともに現地の社会的経済を担う各種組織との交流を行った。

一七日の月曜日の夕方にソウル副市長主催の歓迎レセプションがあり、一八日午前中には登録メンバー全員によるＧＳＥＦの創立準備会がソウル市庁舎ホールで開催された。朴

ソウル市長の開会の挨拶、国連の社会開発研究機関の持続可能開発プログラムの長、スペイン・バスク州の大臣などの基調報告が行われた。午後からは、ＧＳＥＦ憲章草案を検討する準備会と並行して各種分科会が開かれ、社会的経済に携わる各国の組織やグループの発表や討論が行われた。私個人は準備会に参加したが、ポイントになるＧＳＥＦの性格付けや使命に関しては、事前にインターネットでの議論が行われていたせいもあり、原案に対する大きな異論はなかったように思う。語句の適否以外で当日問題として残ったのは、会員の範囲や会費の額、事務局の構成と総会開催国との関係などであったが、これらは新たに結成される事務局で細部を決めることで合意を見た。議論はすべて英語でおこなわれたため、こうした国際会議で日本人が議論に参加することの難しさを改めて感じさせられた。分科会には各自の関心に応じて参加したが、その内容は単なる事例紹介もあれば参加者による議論が深まったものもあり、玉石混交といったところであったようだ。

翌日は四時からの全体会議までは各所に分かれて二〇近くの分科会が準備されていた。午前中には私が参加する「ソウル宣言の会」が主催する「ソウル宣言の意義」というセッションも開かれ、日本側から三人、韓国側から一人が報告した。しかし、場所と時間が確定したのが大会直前でもあり、広報活動の余裕がなく、そのせいか参加者のほとんどが日本人に限られたのは残念であった。

世界社会的経済協議会（ＧＳＥＦ）の設立と憲章の採択

四時からの全体会では「世界社会的経済協議会（ＧＳＥＦ）憲章」が採択され、ＧＳＥＦの設立が宣言された。憲章は前文と総論で社会的経済の定義や理念、任務や目標などを定めているが、正直のところあまり格調の高い文章とは思えない。それでも憲章の採択と

ＧＳＥＦの設立により社会的経済のグローバルなネットワークは一応構築されたといっていいだろう。設立総会では、次回総会をカナダのケベック州、モントリオール市が中心になって行うことが公表され、事務局をソウルにおいて恒常的な活動を開始することも確認された。社会的経済のグローバルな連帯と協働とが実質を伴ってこれから大きく前進することが期待される。

この大会には主催国である韓国の他に一三カ国一八機関、一八カ国の四三団体、国連の専門機関やＩＬＯなど三つの国際機関が参加し、会議への登録者約千二百人、フォーラムや分科会、関連イベントへの参加者の総数は約四千人人と報告されている。

まずは成功といっていいだろうが、私個人としては期待が大きかっただけに物足りないと思う面もあった。確かにソウル市庁舎の中に入れば、ＧＳＥＦの存在感は圧倒的ではあったが、一歩街に出れば社会的経済などどこ吹く風か、といった相変わらずの消費社会の日常であったことである。世界社会フォーラムには参加したことはないが、ブラジルでの最初のフォーラムでは街中に参加者が溢れカーニバル的熱狂に溢れていたと聞く。協同組合都市を宣言したソウル市というからには、もっと全市をあげてＧＳＥＦを歓迎してくれるものと勝手に思い込んでいたせいもあろう。

社会的経済の実践としてのソンミサン・マウルと原州市

その意味では、ＧＳＥＦの前後に「ソウル宣言の会」が独自に企画した、ソンミサン・マウル地区への訪問、韓国の各種生活協同組合との交流会、原州市への訪問と交流の方が、韓国における社会的経済の実態を知るという面で興味深かった。

ソンミサン・マウルというのは、「まちの起業がどんどん生まれるコミュニティ」としてテレビでも紹介されたことのある、ソウル市内のソンミサン（城山）という小山（標高八十メートル）の麓に発展した街である。この山の開発に反対した市民運動を基盤に、自分たちで自主運営する保育園を皮切りに、今では生活協同組合、フリースクール、劇場、本屋、カフェ、リサイクルショップ、食事の宅配、設計から協働して建てた集合住宅、障害者が働く工房、アトリエなど様々な協同組合や社会的企業が起ち上がり、ネットワークを形成している。そうした説明の後にいくつかの施設を見学したが、どこも女性を中心にみな生き生きと働いていた。

原州市は韓国協同組合の故郷といわれる、人口 32 万ほどの地方都市で、ソウル市から車で 2 時間弱の距離にある。ＧＳＥＦ設立大会が終わってすぐバスに乗って原州市に向かい、現地で原州協同社会ネットワークが主催した歓迎マッコリ・パーティに臨んだ。協同ネットワークは合計で 3 万 5 千人の組合を持つ 19 の協同組合や社会的企業の連合体で、原州の各種協同組合運動や貧困者・障害者・若者など弱者支援活動の中心となっている。マッコリを飲みながら聞いた信用協同組合から始まった原州の社会的経済の歴史は決して平坦な歩みではなかったが、先駆的なリーダーの存在の大きさという点で感じるところであった。翌日は、信用金庫、原州医療社会的協同組合、貧困者やホームレス支援の「無料食堂」、障害や貧困が原因で心を病む若者のカウンセリング支援センターなどを見学した。

もう一つの社会変革としての社会的経済

ソンミサン・マウルも原州も、その社会的経済はまだまだ地域住民の一部の活動でしかなく、住民の圧倒的多数が協同組合員になっているスペインのモンドラゴンにはまだ遠く

及ばない。しかし、そこには失われた伝統的共同体に替わる、人間的繋がりを持った新たな都市コミュニティの萌芽がある。その意味で、ＧＳＥＦが主導する社会的経済を発展させる運動は、資本主義や政治体制を打倒・変革する運動とまではいえないにしろ、たんに相互扶助、協働・共助の運動であるだけでなく、新自由主義により荒廃させられた社会の変革・再生運動の新たな流れといえるだろう。社会が変わらなければ政権を取っても国のかたち――人々の生活のありよう――は決してよくならないことは、遠くはソ連の崩壊が、近くでは民主党政権の瓦解が、それを証明している。社会運動を軽視することなかれ、である。